

馬場孤蝶

若かりし日の

島崎藤村君

若かりし日の島崎藤村君

一

島崎藤村君が、今年は五十になったということである。なるほど数えてみれば明かにそういう歳になる筈であるのだが、ちよつと聞くとなんだかもうそんな歳になったのかというような不意な感じのしないこともない。自分の歳でさえ時々、もうそんなになったのかと変な感じのすることさえあるのだから、他人の歳だとちよつと不思議

議の感じのするのは、あえて敢て怪しむに足りないような気もする。しかし、ただちよつと考えると、島崎君を知つてからそう長いことではないような感じがするに拘わらず、実際はもう三十二三年も前のことであるのだから、随分長い昔のことである。

三十年と云えばやがて一時代の間であるのだが、そしてその間には文壇のみで云つても、随分様々な変化や出来事があったわけであるし、吾々個人の上で云つても外形的には様々な出来事に遭遇したのであるにも拘わらず、吾々個人について云えば、そんなに変わっていないと

思う。何時^{いつ}であつたか、島崎君と友人のことなどでいろいろ雑談をしているうちに、島崎君は「人はそう変わるものかねえ」と云つた。僕も「イヤ、なかなか変わらないものだよ」と答えたことがある。實際のところ、人は変わるように見えるのだが、實際の根本的たる人そのものは變つていない。變つたように見えるのは、云わば外形的な部分であつて、人としてのエッセンシアルな部分は、何時までも變らずに残っている。職業が變るとか境遇が變るとか云うことになれば、外形的な部分が思い切つて變るかというに、大抵の場合何^どうもそうでないようである。

中には外形的な部分まで殆どまるで変らないような人さえある。だから、人はおよそ二十歳位までにその人となり^りが定まってしまつて、それから後はその人となりの延長となるわけだと思ふ。

世間には、何等の計画なしに生きて行く人と、油断なく自分の生活に対して計画を立てて行く人と二種類あるわけであるが、後者の方で己れ^{おの}を変えてみようという努力があつたとした場合でもその人の根本的な部分は決して変らない。そういう場合の原動力になるのはその人の根本的な部分であるのだから、云わば外形的な部分は如

何様に変るにしても、その根本的な部分が何時までも残って行つて、却つて外形的な部分が変わっているだけに根本的な部分が変わらないのが殊に眼立つという場合が少くない。

ところで島崎君が己れを変えようとした努力をしたかどうかといふと、殊に君の若い時分に於ては、そういう努力が可なりになされた事を我々は認めざるを得ない。けれども、それがために変わったかとも思われる部分は、島崎君の性格のほんの一部分であつて、大部分は即ち根本的な部分は勿論變つていない。島崎君は、昔から自分

の人生に対する計画を立てる人であった。自分の人生に
対する計画については、可なり綿密に注意をはらう人で
あった。従つて、自分のもたざるものの上に計画を立て
られる筈はなかつたろうと思われる。そういう生活方法
に於ける島崎君は、自己の变革若くは進歩を計ることに
於て、己れをそして己れの持てるものを土台にして進ん
で行くということになつたのである。それが意識的で
あるか、無意識的であるか、ある時は意識的であり、あ
る時は無意識的であつたのである。或はある部分に対し
ては意識的であり、ある部分に対しては無意識的であつ

たのである。或はある部分に対しては意識的であり、ある部分に対しては無意識的であつたという風であつたのか、そういう点に対しては立ち入って考えてみないにしても、吾々が知つた時分からの島崎君の来路が、島崎君自身の根本的な人となりを自ら守り、且つこれを発展させたことになっていることはたしかである。

僕は今いちいち例証を挙げて、そういう当然なことを論定しようとは思わない。ただここでは、僕が知つてゐる島崎君の生活の一部分を語って読者の参考に供しようと思う。

二

島崎君は、名を春樹という。信濃の中仙道にあたる木曾の馬籠まごめというところで生れた人である。

木曾には吾妻橋から美濃の落合まで新道しんどうがよほど前に出来たのであるから、或はまた、中央線の鉄道の木曾を通る汽車も落合から新道の方へ近く通じているのであるから、今日では馬籠のある旧道を通る旅人はなからうと思う。馬籠は吾妻橋と落合の間の旧中仙道にある一駅だ

と聞いている。島崎家は、土地でも可なりの資産家で可なりの名望のある家であつたらしい。お父さんは国学者で、神道の信仰家であつたらしい。亡くなつたのは島崎君の極く若い時分であつたらしい。思う。お母さんの方には僕は数回会つたことがあるが、これはごく落ちついた物固い田舎の婦人のように見受けられた。そのお母さんは明治三十年頃に本郷の森川町の島崎君の兄さんの家で歿なくなられたと記憶する。島崎君には兄さんが三人ほどあり、姉さんが二人ほどあつたと思う。大抵みな存生中であらうと思う。島崎君は、小学教

育を、大部分東京で受けられたのでないにしても、その一部分は東京で受けられたらしいのである。多分よほど早く東京へ出て来られたのであろうと思う。或は十歳に
ならないうちであつたかもしれない。親類ではなかつた
のであろうが、可なり親密な間柄の家に吉村氏というの
があつて、行く行くは、そこの養子になるといふような
話であつた。その吉村家へ一番上の兄さんにつれられて
来たように聞いている。小学校は京橋の泰明小学校であ
つたのであろう。福田徳三君から、島崎君と同じ学校に
いたことがあるといふ話を聞いたことがある。尤も、島

崎君の方が級が少し上であったという話である。小学校を出てから、島崎君が何所の学校へ入られたかよくは知らないが、一遍は三田英語学校とかいう私立の英語学校に通い、そこで今三菱会社の主要な位置に居られる江口定条氏の教をうけたことがある。それから、その後であるか前であるかわからないが、神田淡路町の今の開成中学の前身共立学校にも入っていたことがあるということ、島崎君自身から聞いたことがある。白金の明治学院へ島崎君が入ったのは、二十一年頃であろうかと思われる。その前に一遍高等学校の試験を受けたのではなから

うかと思われる。その時分の島崎君の志望は政治家であつたと聞いている。何ういう関係からであつたか訊いてはみないが、その時分にはもう島崎君は耶蘇教信者になつていて、植村正久氏、巖本善治氏というような当時の耶蘇教界の名士と知り合いになつていたように考えられる。その時分の島崎君が明治学院でも教会でも可なり才気煥発な青年と見做されていたらしい。島崎君の『春』の中には島崎君は、出過ぎるといふ意味で、い鑄掛屋かけやの天秤棒あだなという綽名をもらったといふことを島崎君自身が書いてある。それは兎に角、明治学院での学生としての成

績は、秀れて好くつて、一番か二番位の位置を占めていたように聞いている。

明治十八年頃から起りかけた當時に於ての新らしい文学運動、主として政治若くは思想の方面では、民友社及び『日本人』の連中に代表された運動、それから純文学の方面では坪内氏の一団、森氏の一団及び硯友社の諸氏によつて起された運動が当時の青年には可なり影響を与えた。『日本人』に於ける志賀重昂氏の華やかな文章が、若い島崎君に可なりな影響を与えたことは明かである。明治学院では、学生間に二三のグループが出来て、夫々

それぞれ

廻覧雑誌を出していたのであるが、その一つでは島崎君が主筆の位置であつて、盛んに『日本人』流の文章を發表したというように聞いている。それと同時に民友社などの文芸も島崎君に可なりな影響を与えたらしく考えられる。小説を書いて巖本氏のところへ持つて行つたが、巖本氏から、こんなものを書いてはいけないと云つて叱られてその原稿をとり上げられそうになつたので、もう決してこういうものは書かないと云つて、その原稿をもらひ下げて来たという話を島崎君から聞いたことがある。それは二十一年か二年かのことであらうかと思う。

僕は明治二十二年の一月に明治学院の二年級に入ったのであるが、その二月頃かと思うのであるが、島崎君に紹介されたことがある。それまでは島崎君は学校へは出て来なかったようである。今はもう焼けてしまったが、敷地の北はずれにヘボン館という建物があつて、それが寄宿舍になつていて、その地下室が食堂になつていたのであるが、どこかその入口か何かの少し薄暗いところで島崎君に紹介されたようにおぼえている。洋服を着た脊の低い如何にも気の利いた顔つきの青年で、少し前こごみになつて、少し含羞はにかんだように僕に言葉もなく挨拶し

たのが島崎君であつた。それからずっと一学期の終りまで島崎君は欠席してゐた。

三

九月になると、島崎君がまた学校へ出て来るようになった。その時は脚気だといふので、島崎君は竹の杖をついて教場へも出てゐた。高等学校の試験を受けたのだが及第しなかつたといふ話である。その前の島崎君はどういふ人であつたか僕は自分では知らなかつたのである

が、評判では才氣煥発的人であつたといふのであつたに拘らず、九月に出て来た島崎君がその評判とはよほど変つた意氣銷沈したような、妙に控え目のあるような人であつた。しかし、それでいて時々皮肉なことも云えば、なかなか鋭い考を持つてゐるようであつた。その時分の島崎君は、別にそう自ら進んで友人をつくろうという風でもなかつたようであつたに拘らず、僕等二三の者とは何となく親しくなつたように考えられる。僕はそれまでの島崎君に関する評判から考えてみて、島崎君の変に控え目な意氣銷沈している態度は、高等学校の試験を通過

し得なかつた面目なさを覆おおう手段であるかのよおうな気がしてしかたがなかつた。杖をついて歩いているなども、脚気は実際それほどひどくないのに拘わらず、それも一種のてれ隠くしのようなことではないかと云うよおうな気がするのであつた。然し、それは僕の方の僻見へきけんであつて、実際はそうでなかつたろうと思つたのであるが、とにかく島崎君のその時分の態度なり行動なりが、どうも不自然であるよおうに僕だけには思おへたのだ。僕は忌憚きたんなくそれを云つた。「貴様は陰険でいけない」と僕が笑いながら云うと、「陰険だとは随分ひどいことを云う。どこが陰

険だ」などと島崎君が苦い顔して答えたことなどがあつた。あんまり僕がつけつけいろいろなことを云うので、島崎君もむきになつて取組みが始まつたことなどもあつた。けれども、ただ取組みだけで、殴ぐり合いはしなかつたようにおぼえている。考えてみると、その時分には、もう島崎君に対しては敵意というものを有^もつていたのではなからうと思う。何となく親しくなつて無遠慮にいろいろなことを云うようになつていたからでもあると思われのだ。九月に帰つて来てからの島崎君の教場での挙動もよほど變つていた。先^{せん}には非常に成績のいい

学生であつたという噂であつたが、九月からの島崎君の挙動は、まるで違つていた。その時分の明治学院のやり方は、大抵みな英書であつて、教師はその教科書の中の四頁なり五頁なりを次の日の時間までに、読んで来いと命ずる。吾々の方では、そこを読んでおいて教師の問いに答えるというやり方であつて、大抵の学生は教師の問いに対しては、少しは答えようと骨折るのであるが、島崎君にはそういうところはちつともなかつた。教師の方から島崎君に命ずると、島崎君はちよつとお叩頭じぎをするだけで一言も答ええない。教師も仕方がないから、島崎君

のところを通り越して、他の者に問いをかけるという風であつた。最も面白いのは、試験の時に問題が出てから十分も経たないうちに気がついてみると、いつの間にか教場から島崎君の影が消えていることなどもあつた。ラ
ンデイスという教師は島崎君が答案も出さず、断わりもせず忽然として教室から姿をかくしたのをみて「義務観
念のない学生は仕様がな」と憤りを洩したこともある。
然しその教師は島崎君をよく理解していたとみえて、「島
崎という男は非常によく出来る男だが、非常に怠け者だ」
と或る学生に話したことがあるそうである。

二十一年頃の島崎君は、学生中の弁論家であつて、演説なども度々やつたようであつた。二十二年の秋であつたと思うが、たつた一遍島崎君の演説を聞いたことがある。下を向いて考え考え話すのであつたが、それでも論理もよく通り発音も明晰であつて、可なり上手な演説振りであつたと記憶するが、演説はただそれ一遍切りで、明治学院では演説を聴いたことがない。

そのうちに、島崎君の教場での行動がよほど変になつた。要するに誰とも口を利かなかつた。授業が始まると、どこからともなく忽然と教場へ出て来るのであるが、授

業がしまうとどこかへ見えなくなってしまう。時間間の十分か十五分の休憩時間に吾々は雑談をするのであるが、島崎君がその間どこに居るのかわからなかった。時たま遠くの方を歩いている島崎君の影を見かけて話でも仕かけようと思つて、その方へ歩いて行こうとすると、何時の間にか姿が見えなくなってしまう。その時分、僕は博文館から「歌学全集」という叢書が毎月一冊宛出るのを買つてくれと云つて、島崎君から何冊分かの金を托されていたのであるが、その本を買つて来ても、島崎君に手渡しをする機会がなかった。仕方がないから、島崎

君の荷物のおいてある座席へその本をおいておくと、授業の始まる間際になって、島崎君がどこからともなく這入って来て、その本をみると僕の方を向いて黙って目礼をするという、ただそれだけであつた。

二十三年の夏頃までは、吾々は大抵前に云つたへボン館の寄宿舎に居たのであるが、島崎君も僕もそのうち寄宿舎を出てしまった。島崎君は多分学校の近辺の素人家しろうとやか何かに下宿したのであつたのだと思う。けれどもどこにいるのだから誰も知っているものはなかつた。そういう風であつたに拘わらず、島崎君は学校の教科書の方こそ

顧みないように見えたが、之に反して一般的の勉強は怠らずいろいろな本を読んで居ったようである。二十三年のことか二十四年のことか今はよくおぼえないが、モアレエの英国文人伝のうちのポープ伝を全部翻訳した原稿を僕に見せたことがある。それは茶褐色の肉で刷った半紙の罫紙へ書いた原稿であつたと思う。この罫紙は島崎君が自分で刷つたという話であつた。——ところで、島崎君の吾々と口を利かなくなつた時代は何時頃であつたらうかと考えてみると、どうも二十三年の暮から二十四年へかけてのことであつたような気がする。二十三年、

即ち吾々の三年級の時分には、学校にジュニア・コンテストという演説の競技会があつて、それに一等へは十円二等へは五円という賞金が出ることになつていて、それは英語演説であるので原稿を あらかじめ 予め教師の許へ出して、その中から八人ほど選定されて、その八人が競技に加わるといふことになつていたのであつたが、島崎君は無論その中などには加わらないで、まるで権利を放棄した形でポンチなどを描いて吾々を冷かしたことがある。そういうことから考えてみると、島崎君のミサンスロピック時代もおよそ推定出来るのである。

二十四年の六月、即ち卒業時代に近くなつて来ると、島崎君のそういう、云わば厭人的な態度も變つて来て、吾々とも可なり親しく口をきき合うようになった。卒業してから可なり後になつて聞いたことであるが、島崎君が吾々を絶対避けるようになった時分の心持は、凡そ次のようなものであつたといふのである。

自分は人から才人だの、出過ぎ者だのと云われる。實際どうも人と話をすると、吾れ知らずお座なりのことを云つたり、自分のほんとうに思っていない事を云うように感じる。で、そういうことをいわない様にするには人

と一切話をしないに限る。そういう風に思ったので、誰れにも知らせずに或素人家に下宿して、絶対沈黙を守ることを試みてみたのであるが、なかなか口を利かずにいることは苦しくって仕方がない。そこで対手が人間だから、こっちから何か話しかければ向うからも何かいう。それで向うのいうことに釣込まれて、こちらもいい加減なことをいうわけなのだが、若し向うが人間でなければ、向うからは何もいわないわけであるのだから、こちらが要心して、ほんとうのことさえいうことにすれば仔細はないわけだ。絶対に黙っていることが出来ないとするな

らば、そういう方法を取るより外仕方がないと考えた。ところが、魚籃坂ぎよらんざかあたりの或寺に西行か何かの木像があった。で、その寺へ行つてその木像に話すことにした。それを幾日もやっているうちに、ふと気がついてみると、絶対に黙っていることが出来ないとするならば、木像に向つて話をするのも、人間に向つて話をするのも、別に変りはないわけである。自分の考えが間違つていれば、木像に対してでも間違つたことをいうわけである。人に向つては間違つたことをいってはいけませんが木像に向つてなら間違つたことをいってもよいという理由はない。

また、木像に向つてならば間違つたことをいわずにいられるというのなら、人間に対してもこちらの心次第で間違つたことをいわずにすむわけである。だからこれは人間に対しても、間違つたことをいわない様な修業をしなければ、何んの役にも立たない。だから自分はこれから、人間に対して話をする際に、充分に要心して間違つたことはいわない様にすべきであつて、自分が間違いをしないために人を避けるというのでは意味をなさない。

まず、凡そそういう風に考えて、人を避ける態度をやめて、普通に吾々とも口をきき交際する様になつたのだ

と、島崎君が話して「イヤ、僕はこんな簡単なことをそういう風に手数を掛けなければ解決出来ない人間なんだからね」といって少し苦い笑いを洩らしたことがある。

そんな風に人には会わずにものを考えていると、変なもの、時々妙な幻覚をみる様なこともあった。下宿の庭先へ鶴が来て、ひよいと立っている様な心持ちのしたこともある。また、夜横浜まで歩いていったことがあるのだが、川崎か鶴見あたりで真夜中になって、線路の方をみると、車も何もすっかり火の汽車が線路の上をあつちへいったり、こつちへいったりするのが見えたことな

どもある。

そんな話を島崎君がしたことがある。

四

二十四年の六月に明治学院を卒業してからは、島崎君は浜町の吉村家に居た。前に云った通り、その吉村家の主人は、島崎君を養子に仕様かというような考もあつたらしく、島崎君の学資などは少くとも大分補助したらしかった。それで、学校卒業後の島崎君の職業に就いても、

可なり意見を持っていたのではなかつたらうかと思われ
る。どうも、島崎君が文学の方へ進んで行こうとする傾
向をもっているのに対しては、吉村家では賛成ではなか
つたらしい。文学が職業にする価値のあるものだという
ような考は、当時の普通人の考からは非常に遠いもので
あったので、吉村家の主人は、島崎君の傾向を喜ばなか
ったものと考えてよろしかろうと思う。

島崎君は、その前の年あたりから、前に云ったポープ伝
の翻訳や、その他大分書いたものがあつたらしいのであ
るが、それをみんな焼いてしまったということを知りた

のは、学校卒業後間もないことであつたように思う。「すこし考えることがあつたので、書いておいたものを、蔵の前でみんな焼いてしまった。家のものにどうしたのだと訊かれたので、書いたものをみんな焼いてしまったと云つたところが、何故そんな勿体ないことをすると云つて叱られた」と島崎君が話したことをおぼえている。

その吉村という人の家へは、僕も数回訪ねて行つたことがあるが、その家の主人は、明治座の芝居茶屋に金を貸すというような人であつたそうで、ちよつと、隠居所とでも云いそうな洒落た住居の家であつた。一遍はそこ

の二階へ泊めてもらったこともある。

或日島崎君に逢ったが、島崎君がこういいう話をした。「僕は君達と違って、九ツの時から他人の仲へ這入っていて、自分の家庭というものを知らなかったのも、それが僕の性格に大分影響したと思う。たとえば、変に控え目なところのあるのなども、その一例だろう。僕は、自分のそういう性格の殻を破り度い破り度いと思ってるものだから、此れまで度々不自然に見えるような方向へ走ったことがあるんだ。母親などが東京へ出て来て、それと一緒に住まうようになってから、はじめて自分の

家というものが出来たという形なんだ」

島崎君は、俳諧、浄瑠璃、小説などの徳川文学を可なり読んでいた。矢の倉の方から入って行く浜町の横町の角位なところに、古い和書を買っている京常という小さい本屋があつて、主人は小男の愛嬌のない爺さんであつたが、島崎君はその店で八文字屋ものなども可なり買つて読んだようであつた。僕は西鶴の『武道伝来記』を、島崎君から貰つて今も保存しているのだが。その本なども、島崎君がその店から得られたのではなからうかと思ふ。

西鶴の所謂いわゆる好色本が、淡島寒月氏によって硯友社の人々へ紹介され、それから硯友社の人々によって広く読書界へ紹介されたのは、明治二十三年頃であつたかと思ふのであるが、西鶴の原本は今日ほどではなくとも、その当時でも可なり珍書であつたらしい。六冊位になつてゐる一代女などが五円ほどだといふのであつた。その時分の五円は、学生の一ヶ月の下宿料と小使を合わせたほどのものであつたので、吾々にとっては可なりのお金であつた。だから、島崎君も或は西鶴本の一二種位をその爺さんの店から買ったかも知れないが、西鶴ものをそう

幾種もその店から買ったわけではなからうと思う。代価はとにかくとして、その爺さんもそう幾種も揃え得るところとは出来なかつたろうと思われるからである。その時分、湯島の聖堂裏の処に、武蔵屋という小さい本屋があつて、そこから近松の翻刻が大分出た。それから続いて、西鶴の『五人女』『二代男』の翻刻がそこから出、それから、どこか他の本屋から『一代女』が出、春陽堂から尾崎紅葉の校訂で『本朝若風俗』が出た。島崎君も吾々と同様に、近松ものや西鶴ものは大部分そういう翻刻もので読んだのであらうと思う。

五

学校卒業間もなく、島崎君は巖本善治氏の『女学雑誌』へ翻訳を載せはじめた。一番初めは、アデイソンの『ヴィジョン・オブ・マアザ』の翻訳であつた。その次のは、セキスピーアの『ヴィナス・アンド・アドオニス』の翻訳であつた。これは近松式の浄瑠璃風な文体で訳したもので、可なり巧いものであつた。今読んでみても矢張り巧いものであらうと思う。今の二十一二の青年には、とて迎

もあれだけのものは書けなかろうと思う。島崎君はスタイルリストである。今も勿論そうであるが、昔は尚一層そうであった。文学界のはじめの方に出た、島崎君の諸作を見るならば、何人もそれがスタイルリストの筆になったことを認めざるを得なかろうと思うのであるが、ごく初期のもの即ち前記の翻訳に於てさえ、島崎君のスタイルリストであることは疑もなく明かに表われている。勿論、その時代には吾々の書くものは、言文一致でなく、所謂文章であったのであるから、誰も彼れもみなスタイルを重んじたのではあるが、その中で少くとも吾々の中では

一番スタイリストであった。

僕のところに、島崎君が栗本鋤雲翁じょうんの詩を写した罫紙十枚ほどのものが保存してあるのだが、その栗本翁のところへは島崎君は漢学を習いに行つた。それは『女学雑誌』時代の頃ではなかつたかと思う。木村熊次とうこ氏の夫人であつたらうと思うのだが。木村鐙子とうこという人があつて、明治女学校はその人の力で出来たのだという風に聞いているが、木村氏が幕末の人々と親しかつたので、巖本氏、木村氏というような路を通つて島崎君が栗本翁に師事したのであるかと思う。その他島崎君が田辺氏――

号を蓮舟れんしゅうと云つたかと思う——のところへも漢詩か漢文を習いに行つたことも聞いている。田辺氏は今の三宅夫人龍子氏のお父さんであつて、元老院議官かなんかであつた人であると思う。幕臣のなかでは、勝海舟、木村芥舟かいしゅう、高橋泥舟でいしゅう、所謂幕末の三舟と云われた人々に次いで才名の高かつた人である。——僕は二十四年の十二月から、高知の英語学校を教えに行つたので、島崎君の二十五年中の生活はあまり知らないが、島崎君は二十四年か五年かに巖本氏の明治女学校の英語教師になつた。僕は二十五年の八月の夏休みに東京へ歸つて来て、

眼病にかかって九月の末頃まで東京にいた。その間、島崎君には二三度会ったには違いないが、その時分島崎君がどういう風であつたか、どういう話をしあつたか今は少しも記憶がない。

僕はまた高知へ行つてから、二十五年の秋かと思うが、島崎君から来た手紙には、「この頃蓬萊曲ほうらいきよくの著者北村透谷という人と知り合いになつたが、熱情のある、考の深い人で、大いに益を得た」という一節があつた。

六

二十五年中、巖本氏の『女学雑誌』が大分文学的色彩が深くなって来出した。もうその時分には、その当時名をなしていた文学者のグループ以外に、そういう人々の文学に飽き足らない、謂わば新らしい考をもっている青年文士が、現われかけようとしている時分であつた。そういう人々の一部が『女学雑誌』に集っていたのであつた。

参考のために当時の文学者の分野というものを大体いうと、その時分の紳士団体の方では、森田思軒、條野採

菊、前田叢雪、あえば こうそん 饗庭篁村、南新二というような人々が、

凡そ一団をなしており、それに対して新聞派とでも云う

べき半井桃水、なからいとうすい 右田寅彦・野崎左文というような人々が、

また一団をなしているような形であつたが。それらの人々はみな、謂わば半旧半新というような人々であつて、別に団結としての結束があつたわけではなかつた。団結としては、まず硯友社の一派、その次には民友社の山路愛山、人見一太郎、塚越停春楼その他の人々、その次ぎは早稲田文学の坪内氏を中心にしていた後藤宙外、水谷不倒、島村抱月の人々という風で、その他に内田魯庵、

幸田露伴、山田美妙齋などというような人々はみな遊星であつて、森鷗外氏の如きも、多少団体を支配している傾きはあつたかもしれないが、どちらかと云えば、遊星の中へ数え込むべき人であつた。

ところで、紳士派、新聞派は勿論のこと、当時の純文学の方で一大勢力であつた硯友社の作物は、吾々からみればよほど職業的なもののように見え、謂わば世間慣れた人の態度で、従来からありのままの世相を描こうとしてゐるらしく思われて、当時の若いものの思想感情に触れるところが少ないように思われた。民友社の人々の進

む路もクリスト教的道念と、儒教的道念とを折衷せつちゆうした
ような主張であつて、これもまた、人間味をはなれた方
向のように思われた。早稲田の方はどうかというに、そ
こには学者的研究的の空気はあるが、若いものが赤裸々
になつて人間味を發揮するといふような勢は認められな
かつた。その他種々の遊星諸氏の作品も、中には吾々の
共鳴を禁じ得ないようなものが、あるにはあつたが、総
括して云えば、矢張り当時のローマンティックな文学志
望者の心を惹きつけるには足りなかつた。

二十五年頃はまだ文学及び思想の勃興時代であつたの

で、文学の平野の中のまだ耕されざる部分が大分多かつた。なんとなくそれに気がついて、その方へ飛び出して行きたがっていた青年にとっては、自分の志す方向にあるものの他のものは、なにも眼につかなかつた。一言にして云えば、他人のすることはみんな気に入らなかつたのだ。

勿論、当時の文学志願の青年の考も決して無意味ではなく、眼を自分の奥の方へ向けるとか、人生の根底に横わる何物かを掴むつかというような目的で進もうとしたのはあるが、何にしる側眼わきめもふらずに自分の目的に向つて

進もうとした熱心焦燥な態度は、前節に云ったような通りであつた。

そういうような文学志望の青年達が、『女学雑誌』に集つたのであつた。これは偶然というよりは、当時クリスト教界に於ての名士の一人であつた巖本善治氏が、民友社に対して『女学雑誌』を当時の新人の団体としたいという考があつて、それでそういう新らしい文学を興そうという青年達を、『女学雑誌』へ歓迎して引き寄せたのであらうと思う。これはただ、巖本氏が徳富氏と同じように青年文士の首領にならうとか、『女学雑誌』をも

って『国民の友』と同様に、当時の出版界の勢力たらしめようという考からであったのではなく、巖本氏自身もどちらかと云えば、情の人であって当時『女学雑誌』を繞めぐっていた若い人々のローマンティックな気分と何等かの共鳴をなしていたからであつたものと思う。兎に角、『女学雑誌』は文学欄というようなものを設けて、そこへ島崎君始め、若い人々の作物を載せはじめた。

『女学雑誌』のそういう計画に対して、非常に力になつたのは、星野天知氏であつた。星野氏は日本橋本町三丁目の、近頃まであつた博文館編輯局の真向にあつた砂糖

問屋の若主人であつた。駒場の農林学校の別科かなにかを出た人であるが、撃剣だの薙刀なぎなたなどの稽古をしたとみえて、明治女学校へ武術を教えに行つていた。星野君の家の商売は、叔父さんかなにかがやつていたので、星野君は云わば若隠居の形で、文章などを書いてゐることが出来たのであるらしい。

そこで、星野君、島崎君、北村透谷君、戸川秋骨君、平田秃木君とそれに戸川残花君を加えて、それらの人々が『女学雑誌』の文学欄へ力をつくすことになつた。それらの人々は、みな一度はクリスト教信者であつたので

あるが、文学をやり出してからは、クリスト教の信仰とかクリスト教的な道德とかいうようなものの範囲外へ、だんだん思想が踏み出すようになって、それらの人々の作物が、即ち殆ど反クリスト教的思想を帯びた主張を含んだような作品が、『女学雑誌』へ載ることはクリスト教界の名士であつた巖本君の立場と衝突することが起つて来出した。

それで一時は、『女学雑誌』の文学欄を盛にするという計画で進んだものが、そこで一頓挫を来して若い人々の方では、これは何とかしなければならぬという考が起

った。若い人々のことであるから遠慮して、おとなしいものを書くことは厭であるし、さればと云って、充分に気焰を上げては、實際巖本氏に気の毒だからというので、これは、いつそのこと別に雑誌を興そうじやないかという相談が、前記の若い数氏の間起って、とうとう別な雑誌を発行することになった。出資及び経営は、星野君及星野君の弟の男三郎君おさぶろう（夕影君）が引きうけることになった。それは二十五年の末頃であつたろうと思う。

島崎君はその前後に、明治女学院の教師をやめて、その後へ北村透谷君が入った。島崎君の推薦であつたと聞

いている。

七

それで、『文学界』の初号の出たのは、二十六年の一月の下旬であった。初号には島崎君の『悲曲琵琶法師』六齣が載った。固もとより若い人の作なのだから、筋も思想も極めて単純なものであるが、全部に涉わたって何か新らしいもの、何か新らしい主張を提出しようとした努力は、否いなむことの出来ぬものであった。『琵琶法師』は一行一行

に分けた韻文体の戯曲であったが、各行の字数は一定していない自由なものであったけれども、ところどころに十七字の行がおいてあるのであった。それでそういう所で調子を締めて行くつもりであったのだらう。二十三四年頃から、島崎君が元禄時代の俳句や俳文を研究していたので、十七字の句を詩の中へ取り入れることを試みるようになったのであると思う。断言はし兼ねるが、『琵琶法師』は透谷の『蓬萊曲』からは可なりの暗示を受けたのではなからうかとも思われる。その他この作には近松の浄瑠璃から受けた感化も可なり表われているように

見える。形式の上から見れば、まだ試みの階段にあるのであるから、ひたすら只管伝統を守った完成的作品をのみ尊ぶ人々から見ると、『琵琶法師』の如きは如何にも半可通の作品のように思われて同情を以て迎えられない作品であるに相違なかったが、習俗的にたど辿られた伝統の路を離れて、自分達の心と直ちに共鳴する古い文学のうちの或る部分の精神を復活させようと力めた心持は、充分そこに表われていると思う。三四号後になって出た『茶のけむり』などは早稲田文学には『枯れ尾花』というパロディが出て、ひどく冷かしてあったが、そういう印象を与

えるような部分のあったことは否み難いけれども、全体の精神若くは作者の所期から云えば、決して笑殺してしまふ可きものではなかったことは明かである。

先日、島崎君が、『蜘蛛』に出ている僕のこの話を見て、「あの時分の僕は自分が何を書いているのだかよくわからなかった。何ういう風にすればいいのか、自分には分らなかつた。要するに、自分のものというものを、何も持っていなかつたのだ。それから見ると他の諸君の方が、確かに自分のものというものを書いていた」と云う様な意味のことを云つた。勿論、そういう様な所はあ

つたに相違なからうが、これを他の方面から見れば、そういう所が反^{かえ}つて島崎君の強味であつたと思う。自分の持っていない何物かを求めようとする、言葉を換えて云えば、自分の持っている何物かをしつかりと捉え得るようにならうとする努力、そういう努力のために作者の全人格が甚だしく動揺しているという所が島崎君の初期の作物からは明かに看取せられると思う。即ち、生まんとする悶え、作り出さんとする躑^{もが}きがそれらの作品の大部分で認め得られる。

『文学界』の連中の芸術的の方面の目的というのは、今

の言葉で云うならば、各自の個性、少くとも主観をば充分に且つ明かに投影した作品を発表しようとするのであった。然し、当時の文壇に現われた先輩の作品は吾々のそういう心持から見て模範にすることの出来るようなものは殆どないと云ってよかった。そこで、そういう目的をもっている者共は、自ら敢然起って自分達にとって最もコンジニアルな形式なり、精神なりのものを、何か作り出さなければならなかつた。その当時吾々の間には、ジェニユインなものを作りたいう言葉をよく用いた。即ち、純なものを作りたいうのである。今日の

言葉で云えば、充分個性の表われたものを作るという意味になる。島崎君がそういう純なものを作り出そうと、最も多く努力した人の一人であることは疑いが無い。

そういう生みの苦しみ、創造の努力の、島崎君に於て非常に大きいものであったことは勿論否み難いのであるが、然し、また一方から云うと、そういう努力をしななければならぬ位置に島崎君が自然と置かれていたことも認めないわけにはいくまいと思う。それに就いては二つの見方がある。

一つは、少くとも当時の文壇全体の有様に対する島崎

君——並びに芸術の新らしい傾向を作り出そうとする人々——の位置である。前にも一寸云った通り、所謂個性を充分に發揮するというような様な作品の模範は、少なくとも充分な模範は、当時の文壇には存在していなかった。それで、自分に最も適した傾向のものを作ろうというには、その形式からして各自が自分で作り出さなければならなかったのである。故に当時の吾々は、何等かせめて形式だけに於てさえも新らしいものを作り出さなければならなかったのである。謂わば、何等か新らしいものを作り出すことを周囲から催促された形になっていたのである。

る。島崎君が独創的天分を多量に持っていた人であることは疑いなしとするも、周囲の状態がそういう独創力の発揮に可なりな衝動を与えたことは疑いがないであろう。

今一つは、島崎君自身の生い立ちの境遇である。もうたしかに十年程も前だと思ふのだが、島崎君が浅草の新片町に住すまっている時分に、或る日何かの話の序ついでに「僕などは、馬場君とは大変生い立ちが異ちがう。君は中流以上の階級に生れた人なのだが、僕はローアー・ピープルの中から出たものなんだからね」と云ったことがある。これは勿論島崎君が自ら卑下した言葉であつたらうと思ふ

のだが、今考えてみると、その言葉には余程意味があると思う。島崎君の所謂中流以上の階級の方は、古い道徳律、古い因習、古い伝統というようなものに縛られていることが多いのであるが、島崎君の所謂ローアー・ピープルの方は、そういう点が余程自由であつたと見てよからうと思う。然^そうすれば、そういう階級から出た人は古い習俗に煩わさるることが、少くとも余程少ないものに見えることが出来るであらうと思う。そういう階級から出た人々は、中流以上の階級の古い習俗、古い伝統をば充分に批判することが出来る位置に立っていると思う。島

崎君は真の意味でのローアー・ピープルの出ではないと思うのだが、それにしても古い習俗、古い伝統に対して、誤らざる批判をなし得るチャンスが、吾々よりは多かつたものと見る事が出来ようと思う。島崎君の境遇が、島崎君が新らしき路へ進むことに対して何分か有利なものであったとするならば、島崎君の生れた階級に就いて島崎君自身が云ったような考察をするのも一つの見方であらう。第二には、文字とか芸術とか云うものについて、古くから幾分かの伝統を有っているような家庭に育った者がある。例えば、父祖の時代から、日本の純文学に対

する嗜好が可なりあつて、既^もう十二三の時分から文政時代以降の文学には可なり親しんでいて、文学のそういう形式が可なり頭に染み込んでいるような青年があるのであるが、島崎君の育つた境遇はそういう青年とは少し違つていたかと思う。島崎君は、吾々よりは少し大人に近くなつてから日本の文学に接するようになったのではなく、かろうかと思う。島崎君が文政以後の徳川文学よりは、それ以前の徳川文学の方に多く接触したのではなかろうかと思う。若し、そうだとすると、日本の近代文学の伝統習俗というようなものに感染することが、吾々よりは

余程少くなかったのではなかろうかと思う。吾々の方は、文政以後の古い文学の習俗伝統で頭を固められて、後で元禄文学を知ったのであるから、その両時代の文学の間の共通点を見たのみで満足して、元禄文学そのものから強い感化を受けることが出来なかつたのであるが、文政以後の文学にあまり親みを持っていなかつた島崎君は、元禄文学それ自身について、直ちに自己と共通な点を捉えることが出来たのであつたかと思う。そういう点も新しい路に突進した当時の島崎君を見るためには一応考慮すべきところであらうと思う。

日本文学電子図書館

若かりし日の島崎藤村君

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治文壇の人々」、
ウェッジ文庫版

2009年10月26日 第1刷発行

日本文学電子図書館